図書館には情報がいっぱい

「本を借りて読む」「レポートを作成する」「試験勉強をする」「映像を見る」「リラックスする」……大学生にとって図書館は、4年間付き合う大切な施設だ。有効に活用してほしい。生田キャンパスで活動する図書館学生ボランティアＣｏｍｐａｓｓの5人に、利用の仕方や魅力を聞き、坂野明子図書館長（文学部教授）にコメントをいただいた。またゼミで本に関連する活動をする野口武悟文学部教授に「読むこと」の大切さを聞いた。

作製したポスターやチラシを持つ学生ボランティアの皆さん

図書館学生ボランティアに聞く

好きな場所見つけて

図書館学生ボランティアは「魅力的な図書館」を目的に2016年に誕生。イベント企画や展示、選書した資料のＰＯＰづくりなど、学生の視点で図書館を広報する。本年度は生田キャンパスで10人が活動している。

代表の島村晋弥さん（文3）と、今林萌さん（同）、齋藤里佳子さん（同）は司書課程を受講している。島村さんは「学ぶための資料が豊富にあるのが大学図書館。司書課程の課題に取り組んだ時、分からないところは本学の図書館ですべて解決できた」と振り返った。今林さんは「とにかく本が好きで小学生の頃から毎日図書館に出入りしていた」、齋藤さんは「高校時代、図書館の貸し出しや書架の整理を手伝ったのが楽しかった。大学の図書館で何ができるか、新しい発見を求めてボランティアになった」と話した。

自習机で本を読む

人気の視聴覚コーナー

小柳璃紗さん（経済3）も「宮嵜晃臣ゼミで自動車産業をテーマに論文を書くのに苦労した。図書館で資料が見つかりうれしかった。図書館が身近な存在になった」と話す。

中根友之さん（文3）は作家・小林恭二文学部教授のゼミに所属。小林ゼミは学期に2本、5000字の小説を書くのが活動の柱。中根さんはライトノベルを書いている。「静かな空間にいると心が落ち着く。集中したい時は図書館を利用します。書くことが好きなのに今まで本はあまり読まなかったが、ボランティアに入って読書量が格段に増えました」と笑う。

レイモンド・チャンドラー著、村上春樹訳の『ロング・グッドバイ』がお気に入りの一冊。

図書館には、映像を見たりディスカッションする場もある。齋藤さんは4階のアクティブラーニング・プラザがお気に入り。海外ドラマシリーズを借りて楽しむそうだ。

「本館と生田分館を用途によって使い分けている」と島村さん。「本館は学術書を探す時、生田分館は文芸書などを読みたい時」に訪ねる。今林さんも「本館は試験前に、生田分館は好きな本を読んでのんびりしたい時に」と言う。

島村さんは「図書館は試験前にだけという学生が多いが、もっとさまざまな利用法がある。普段から使わないともったいない。私はM3階の書庫脇にある自習机が好きな場所。ぜひ図書館で自分の好きな場所を見つけて」と強調した。

専修大学図書館　生田キャンパスには本館と生田分館、神田キャンパスには神田分館、法科大学院分館と計4館がある。蔵書数は全体で約187万冊、雑誌は約2万2千タイトル。ほとんどが開架式で、書架から直接手に取ることができる。

広がる世界 大いに楽しもう

坂野明子 図書館長（文学部教授）

この十数年の間に、図書館はずいぶんイメージを変えてきました。研究・教育のための書籍を大量に収集しており、お堅い印象がつきまとう大学図書館ですが、サブカルチャー研究がアカデミズムの世界で認知されたこともあって、最近はライトノベル、ＤＶＤやブルーレイ、マンガまでそろえています。

また、グループラーニングが重視されるようになり、そのようなスペースも用意されています。図書館学生ボランティアの皆さんのお話を伺っていると、図書館が広げた腕の中にまっすぐに飛びがちな学生さんにも伝えようとしてくれています。

どうぞ、皆さんも彼らの後に続いて、自分なりの図書館活用法を見つけてみませんか。

春の企画展開催中

春の企画展「知の森へようこそ～図書館が所蔵する魅力あふれる資料の探索～」が５月８日から開催されている（６月２日まで＝５月中の土日は除く）。本学の貴重書や「豆本」「大型本」「巻子本」「マイクロ資料」など、普段目にすることがない資料を展示。探し方とともに紹介している。

「読む」ことで多様な能力を

野口武悟 文学部教授（図書館情報学）

若者の活字離れは進む一方です。「学校読書調査」（全国学校図書館協議会、毎日新聞社）によると、ひと月に本を一冊も読まない割合（不読率）は、高校生で年々高くなり、2017年に5割を超えています。高校までの読者習慣に影響され、大学生も同じ傾向にあります。

私が人文・ジャーナリズム学科の入門ゼミを担当していた時は、新聞の1面下コラムのような文章や書評を毎週書かせていました。本や新聞を読んでいる学生はそれができるし、しっかりした文章を書く。読むことによって好きな文体を見つけ、自分のモノにしているからです。

専門ゼミの学生たちは、障がいのある人や、日本語を母語としていない人も読めるＬＬブック作りに励んでおり、読むこと、書くことはもちろん、本を作る面白さも体験しています。

図書館はさまざまな好奇心を満たしてくれる知の宝庫です。

本の数だけ考え方がある。そんな多様性と出合える場です。ここで情報を探し出す楽しみ、主体的にものごとをみつめる喜びを味わってほしいと思います。

読む力は、一朝一夕には身につきません。読む力が育たないと、重要な情報を読み取れなくなります。スポーツ選手がトレーニングを積んで強くなるのと同じ。読めば読むほど力がつく。つまり読書にも日々のトレーニングが大事なのです。

専修人の新しい本

五日市憲法

新井勝紘著

1968年夏、東京の五日市にある「開かずの蔵」と呼ばれる朽ちかけた土蔵から、和紙24枚つづりの文書がみつかった。この地域の自由民権運動から誕生した「五日市憲法」草案である。当時学生で、最初にこの草案を手にした著者はのちに日本近現代史の学者となる。

本書では、発見に至った経緯を当時の時代背景とともに紹介。起草者である千葉卓三郎の足跡をたどり、草案と格闘してきた半世紀を振り返ることで、千葉ら草案づくりに情熱を燃やした五日市の人々の真意に迫る。

そこから見えるのは明治憲法発布前である1880年代の民衆の姿だ。明治維新ののち、国のあり方を真剣に考え、議論を重ね、自分たちで憲法を創ることによって新しい日本の姿を夢見た。

著者は言う。「基本的人権について多く触れている五日市憲法の、現代に通じる輝きを感じ取ってほしい」（岩波新書・本体820円＋税）

著者（あらい・かつひろ）＝元文学部教授。自由民権運動史。

映像の可能性を探る

土屋昌明編著

本書は2013年から3年間にわたって取り組まれた社会科学研究所特別研究助成のグループ研究「方法としてのドキュメンタリーの形成とアジアにおける発展」の成果をまとめた一冊である。

20世紀後半、映像による視覚文化が発展するプロセスで、特にドキュメンタリー映画が、どのような作用を及ぼすものとして扱われてきたかを、「事実記録」「プロパガンダ能力」「文化人類学への利用」「文化理解や文化交流への活用」などの側面から考察している。

各章の担当は▽第1章＝下澤和義商学部教授▽第2章＝上原正博法学部教授▽第3章＝根岸徹郎法学部教授▽第4章＝土屋昌明経済学部教授▽第5章＝三田村圭子経営学部非常勤講師▽第6章＝劉文兵経済学部非常勤講師。

社会科学研究叢書20。（専修大学出版局・本体3200円＋税）

編者（つちや・まさあき）＝経済学部教授。中国語。